



# 成田ロータリークラブ 週報



国際ロータリー2015～16 年度会長 K.R. ラビンドラン

## 第 2666 回例会 平成 27 年 7 月 31 日(金)

- ◇ 点 鐘 佐瀬 和年 会長
- ◇ ロータリーソング 我らの生業
- ◇ 四つのテスト 南日 隆男 会員
- ◇ お客様  
千葉商科大学講師 久保田 滋子 様  
千葉西ロータリークラブ 宮間 大輔 様  
成田コスモポリタンロータリークラブ 藤崎 康人 様



### ◇ ニコニコボックス



**佐藤 英雄 会員**：先週 24、25 日、栃木県的那須に行ってきました。中学時代の友達 6 人、夫婦で 10 人。始まりは高校を卒業してその年にキャンプでもという話になり今年で 54 回目です。正月は 2 日に顔合わせしております。ロータリークラブの歴史ほど長くはないですが、夫婦 6 組とも平穩に、子供達もそれぞれ大きくなりました。埼玉県のかきにすんでいる男が、成田の菊谷で鰻を食べたいと言い出した。その中の一人が、2 年ほど前にヨーロッパ旅行に行った時、そのツアーの中に菊屋の従業員のご夫婦と一緒に、楽しい 1 週間だったそうです。一度、菊屋の鰻を食べたいと申ししておりましたので、その節は宜しくお願い致します。



**岸田 照泰 会員**：欠席続きで、大変皆様にご迷惑をおかけし恐縮しております。そのお詫びでニコニコさせていただきます。本年も半年が過ぎ、成田山も大過なく過ごさせていただいております。特に 6 月にはミシュラングリーンガイド 2 つ星を獲得いたしました。各方面からお祝いの言葉を賜り感謝申し上げます。これも成田市の皆様方、観光協会、商工会議所等々、諸団体の皆様のお陰でございます。今後は、外国人の方々に対してどう対応していかなければいけないかということで、頭を悩ましている状況です。いよいよ明日から 8 月。俳句の世界で言えば

盆の月、感謝の気持ちを仏様に伝えるものです。また4日から成田山の競書大会。4日から8日まで中国を訪中してまいります。貫首はじめ、総勢50名、私も参ります。成功裏に終わるように祈りたいと思います。これから下半期を迎え、成田山ではお正月の準備に入ります。皆様にはこれからご教授いただきますようお願い申し上げます。



**音花 昭二 会員:**2つ嬉しいことがございました。1つは、先日の都市対抗野球において、所属会社の大阪市代表日本生命野球部が見事に優勝することができました。18年ぶり4度目のVということで大変喜んでおります。準々決勝、準決勝、決勝3試合とも延長戦を制したということで、仲間を信じ最後まで諦めない精神を学ばせていただきました。もう1つは、先日28日江戸崎カントリーにて、有志の方によりますプライベートコンペにおきまして、何とハンディーに恵まれ図らずも優勝させて頂きました。メンバーに恵まれて、、と申しますが、ロータリーに入らせていただき素晴らしい先輩方と一緒にできて本当に光栄に存じております。2つの優勝、好意と友情に心より感謝申し上げます、ニコニコさせていただきます。



**角田 幸弘 会員:**私がロータリーに入会できたのは、秋葉会員のお陰です。秋葉会員がお亡くなりになって思い出す事が沢山あります。秋葉会員が熱心にCLPに取り組んでいらっしゃる時で、仕事は一人でやらない、情報を共有し人に任せることも大事であるとおっしゃっていました。秋葉会員を慕って、自宅に若い方も沢山出入りしていらっしゃいました。社葬では秋葉会員を偲びたいと思っております。私の本業は歯医者ですが、この度、Lightningに掲載されました。回覧致します。



**石橋 菊太郎 会員:**佐藤会員から何度も菊屋の名前を出していただきました。佐藤さんのお友達がお食事に来ていただけそうなのでニコニコいたします。



**平山 秀樹 会員:**さきほど佐藤さんの同級生との御旅行のニコニコで、旧聞に属する話となりますが、ニコニコしなければならないことを思い出しました。さる6月20日、麗澤高校48期の同窓会が行われました。全寮制の高校なので、北は青森から西は大阪、

四国まで50数名が集まりました。ご主人が同級生なので、安食の金田屋さんで開催されました。そのまま話がつきず、半数あまりがセンターホテル成田に泊まりました。せっかく成田まで来たんだから、成田の参道、成田山を案内しろということで、平山建設の代表作である千



葉興銀成田支店さま、長命泉さま、米屋本店さまなどを案内しました。10時のお護摩にみんなで参加し、次回と同窓会の成功を祈る御護摩札もいただきました。仁王門の前で記念写真もとり、一粒丸三橋薬局さんでヤツメウナギの漢方薬で盛り上がりがありました。その後、再度米屋本店さんに行き、羊羹資料館のモラロジーコーナーで10分以上も長広舌をふるってしまいました。素晴らしい同窓会だったのですが、唯一残念だったのが、同級生ですら私たちが高校時代を過ごした15万坪とも言われるキャンパス、社会教育としてのモラロジーが、すべて米屋様、諸岡長蔵翁のお陰であることを知らなかったことです。改めまして、成田の皆様のお蔭、特に米屋、諸岡会員のお蔭でこのような体験をさせていただいたことを感謝して、ニコニコさせていただきます。

#### ◇ 会長挨拶

#### 佐瀬 和年 会長

先週、「今回は刀の話をしします」と申し上げました。戦国時代、手柄を立てた武将に褒美を与えるに当たって、乱世で領地の線引きが曖昧になり、領地を与える代わりとして、愛用の刀、茶器などの焼き物が与えられました。焼き物は桐の箱に入り、箱には「箱書き」と言う、署名がして有ります。この「箱書き」が何よりも重要で、約束手形のような効用がありました。それが為に「番町皿屋敷」のような悲劇も生まれた訳です。刀は鎌倉時代の物が、最も価値が高く近年に至るまで、誰も再現する事が出来ませんでした。松田次泰(まつだつぐやす) 刀匠が、苦難の末再現し、横綱白鳳の土俵入りに使用する「太刀」を作りました。



#### ◇ 委員会報告

##### ・クラブ広報委員会

##### 甲田 直弘 委員長

先週24日に地区IT広報公共イメージセミナーへ出席して参りました。前半は地区委員長である大谷様よりロータリーITツールなどの講義で、後半は千葉銀行広報部による講演でした。どちらも今後の広報活動に役立つ貴重な時間であり大変勉強になりました。また、ロータリーの友事務所より、特集記事のための情報募集の依頼がきておりますので、後ほど委員会にて検討致します。



##### ・ロータリー財団・米山記念奨学委員会 遠藤 英一 委員長

米山記念奨学へ設楽正行会員より100,000円  
ロータリー財団へ齊藤三智夫会員より\$1,000(124,000円)ご寄付を頂きました。



##### ・奉仕プロジェクト委員会

##### 佐藤 英雄 社会奉仕リーダー

今年度の各奉仕の方針を検討したいとのことで委員会を開催いたします。8月7日、菊屋さんで18時からの開始です。





◇ 幹事報告 深堀 伸之 幹事

<回覧>

- ・第49回インターアクト年次大会 8月27日(木) 10時より  
茂原樟陽高校 締切8月4日(火)
- ・第13回日韓親善会議 9月4日13時より  
グランドプリンスホテル新高輪 登録締切7月15日→8月4日
- ・RI本部より  
8月の特別月間の名称変更の通達  
「会員増強・拡大月間」から  
「会員増強・新クラブ結成推進月間」
- ・富里RC8月の例会変更 8月4日(火)、11日(火) 休会
- ・多古RC例会場の変更
- ・富津シティRC8月の例会場・事務局変更
- ・ガバナー事務所夏季休業 8月10日～14日
- ・財団質NEWS 8月号
- ・富里RC週報
- ・富里RC・多古RC活動計画書



<連絡>

- ・ロータリーレート8月 124円
- ・8月3日、IMの出席はクールビズで (IMの前に12時から13時まで理事役員会)
- ・本日、例会終了後プログラム委員会
- ・秋葉会員の会社・家族葬の合同葬8月7日、11時より八富斎場

◇ 表彰

マルチプルポールハリスフェロー  
石橋菊太郎 第7回目



◇ 入会式

大塚 洋 (おおつか ひろし) 会員 成田国際空港株式会社 取締役  
推薦人 佐瀬 和年 会員、深堀 伸之 会員  
顧問 石橋 菊太郎 会員  
所属委員会 クラブ管理運営委員会 プログラム  
奉仕プロジェクト委員会 国際奉仕  
職業分類 空港管理

私は国土交通省の役人でございます。30年くらい勤務しておりますので、勤務している場所は大変多く、東京、成田以外に福岡、岡山、大阪、ボストン、ワシントン、案外住みやすいところに勤務しております。この成田での勤務、そしてロータリー生活も楽しみにしております。母は長野生まれ、父は我孫子の出身です。小学校の頃は、上野駅の下のプラットホームから蒸気機関車で父の実家の湖北に着き、実家にご挨拶をした後、成田山までお参りに行ったという記憶があ



ります。プライベートではこのぐらいで、後は仕事のお付き合いですが、今日から皆様方とお知り合いになれ楽しみにしております。

笹子 恵一（ささこ けいいち）会員 日本空港ビルデング株式会社 成田営業所 総支配人  
推薦人 佐瀬 和年 会員、深堀 伸之 会員

顧問 平野 省二 会員

所属委員会 会員増強・退会防止委員会 増強・選考・職業分類  
奉仕プロジェクト委員会 国際奉仕

職業分類 空港管理

前任の鈴木と1年で交代し皆様にはご迷惑をお掛けしております。千葉県小湊生まれ。昭和56年に日本空港ビルデングに入社。入社してから34年ほど経つのですが、25年くらいは成田で勤務しております。高校時代は柔道をし、東海大学の山下とは一緒に勝浦の国際武道大学でよく練習をしました。今はその時の影響で、椎間板ヘルニアになってしまい、腰が動かなくなってしまいました。体力面がちょっと落ちていますが、ロータリークラブに入会し一生懸命頑張りますので、ご指導、ご鞭撻をよろしく願いいたします。



#### ◇ 卓話

## ～ 門前町 成田 ～

千葉商科大学講師

久保田 滋子 様

本日は卓話にお招きくださりありがとうございました。ちょうど2年前の夏、この場で「門前町研究事業」の方向性についてお話いたしました。あつという間の2年間で、この調査も今年度いっぱい終わることになりました。契約は単年度で、調査の進展具合によって継続を話し合うことになっているので、先月あと1年間の延長を申し出ましたが、残念ながらすべて今年度で終わりということになりました。



さて、話題を変えまして、成田市がミシュランの2つ星に選ばれたとのこと、大変良いニュースでうれしく思っております。成田というのは、空港以外に海外での知名度は低く、日本が好きで何度も日本に来ている人でさえ、空港のそばにこんなにいいお寺と門前町があるということを知っている人はあまりいないと思います。私はこの門前町調査のことを、ときどき海外の友人に書き送っていますが、お寺はもとより、門前町のたたずまいや伝統的な行事など、大変興味をもってくれます。それもあって、ぜひもっとこの街を知ってほしいという思いを強く持つようになりました。空港の近くにあるのでちょっと立ち寄るだけではなく、成田を目指して来てくれそうな人々にもっとアピールしたいと考えております。そこで、ちょっと横道にそれますが、もしかしたらこの先成田に役立つかもしれないことを、自己紹介も兼ねまして、少しお話ししたいと思います。

私の専門は文化人類学で、主に在外チベット人の社会と文化について研究しております。1959年にダライラマが中国からインドに亡命しましたが、在外チベット人とはそれにともなって、難民としてインドやネパールに流出し、その後世界中に散って生活している人々です。同時にヨーロッパにおける仏教事情についても研究しております。調査のために、チベット亡命政府のあるインドのヒマラヤ山中にも長期で滞在いたしました。現在は主にスイスでフィールドワークをしております。最初はチベット人のことだけを研究していたのですが、だんだん西洋にひろがる仏教に関心を持つようになりました。今、ヨーロッパの町にはたいい大なり小なりの仏教センターがあります。最初は、東洋趣味的な一種の流行、ポピュラーカルチャーのようなものと思っておりましたが、長期に滞在し、関心を持って様子をうかがっておりますと、思ったよりもずっとすそ野が広く、今や欧米の文化として仏教が深く根付いていることに大変驚きました。こうした欧米における仏教の広がりには、チベット人が深く関わっていて、私はこれに大変興味を持ちました。



チベット仏教の僧侶

チベット人はインドに亡命政府を持っておりまして国家を標榜しています。憲法もありますし、内閣もあります。しかし、もちろん土地がなく産業はありません。しかし、誤解を招く言い方ですが、唯一の大きな輸出産業があります。それは仏教です。チベットでは一家に一人か二人はお坊さんがいて、僧侶人口が非常に多いという特徴がありました。早ければ5、6歳で出家して僧院で暮らします。ダライ

ラマはチベット仏教のトップであり、政治的なトップでもあります。チベットはずっと政治と宗教は一体でした。大きな僧院がたくさんあって、リンポチェと呼ばれる活仏、つまり生まれ変わりの高僧は、政治的、社会的に大きな力があり、その多くはダライラマとともに難民として国外に逃れました。彼らが出て来た1960年代、ヒマラヤの下の世界はどんな風であったかといいますと、ビートルズ全盛期でした。アメリカやヨーロッパを中心にカウンターカルチャーという新しい文化の風潮が席卷したときで、それまでの世代とは異なる、現代につながる文化が誕生し、当時の大人が若者に眉をひそめていた時代でした。それまで、西洋は基督教の盤石の価値観の中において、世界は西洋基督教先進社会と、それ以外の野蛮な社会に二分されていると西洋人は勝手に考えていました。しかし、その時代を生き抜いた若者は、そのような西洋中心主義的な基督教の価値観に疑問や反抗心を持つ人も多く、ヒッピーと呼ばれる若者がインドやネパールに放浪の旅に出ていきました。そこで彼らは、ヒマラヤからおりてきたチベット人僧侶たちと出会うわけです。高僧たちの多くは、欧米の大学のインド・チベット学講座に招かれ、そのまま永住してチベット仏教センターを開いた人もいました。



タシルンポ寺の大弥勒殿（典型的なチベット仏教寺院

チベットといいますと、シャングリラ（桃源郷）というイメージもあり、隔絶された世界を想像しますが、貴族や高僧それに交易商人は、世の中の動きをイギリスの植民地であった隣国のインド経由で知っていました。しかし、それはごく一部で、ほとんどの人は西洋という世界を知らなかったと思います。ヒッピーたちもチベット人との出会いは大きな刺激でした。西洋文明にすれていないと言いますか、キリスト教の影響がまったくと言っていいほどなく、非常に新鮮な世界であったと思います。世界中のほとんどの地域にはキリスト教の宣教師が入っていましたし、南米はスペインによって征服されたという歴史があります。チベットにも数人の宣教師が到達しましたが、世界の屋根まではキリスト教の影響が及ばず、西洋から見れば、「穢れなき文化」だったわけです。この幸運なコンタクトが、仏教を西洋へもたらすきっかけになりました。ダライラマをはじめとする多くの僧侶が難民となってチベットの文化を絶やさないためにと多くの支援団体ができて、チベットにあった大きな僧院がインドやネパールに再建されました。その僧院の優秀な僧侶が西洋に迎え入れられ、のちにアメリカとヨーロッパに仏教ブームを巻き起こしました。

ドイツでは19世紀のころから仏教に関心を持つ哲学者もいて、社会のエリート層は哲学としての仏教を知っており、ハンブルクでは20世紀のはじめごろにはスリランカの僧侶に教えを乞う人が出始め、1906年に仏教協会が設立されています。同じころ、日本からは鈴木大拙がアメリカにわたり、禅や禅文化を伝えました。そのような下地があったとはいえ、60年代のカウンターカルチャームーブメントの渦中にいた若者は、全く新しい感性で、布教に訪れたチベット僧を歓迎したのだと思います。さらに60年代は冷戦の真ただ中で、ダライラマがインドに亡命したのもベルリンの壁ができたころです。中国共産党から逃れた人々であり、キリスト教の影響を全く受けていない人々であり、さらに仏教という新しい価値観をもたらしてくれるということで、チベット文化への関心が高まり、同時に欧米ではチベット仏教センターが急増していきます。

現在、ヨーロッパでは単なるファッション的な「サブカルチャー」ではなく、はっきり仏教徒を名乗る人が増えています。キリスト教のように洗礼を受けたりしませんから、「仏教徒になる」といっても、なにか境界線があるわけではありませんが、お経を読んだり、座禅を組んだり、リトリートコースに通ったり、僧侶の講義を受けたり、さまざまな実践を行っている人が仏教徒とその予備軍になっています。仏教徒が増えているというのは、キリスト教の凋落と深い関係があります。その実情を調べるために、私は昨年スイスの男子修道院でひと夏を過ごし、老神父や宣教師とじっくり語り合ってきました。ヨーロッパにおけるキリスト教の凋落は明らかで、聖職者になる人もほとんどいないという現状を知りました。それがイコール仏教徒の増加であるとは言えませんが、両者が相関関係にあることは間違いないでしょう。

日本人から見ると、同じ仏教といっても日本の仏教とチベット仏教はまったく別物ですが、スイスやドイツで見る限り、チベット仏教センターに通いながら、禅のコースにも行く、日本人僧侶に弟子入りするというように、「仏教」という生き方、考え方を総体的にとらえている場合が多く、我々が感じるような文化の違いはほとんど気になっていないようです。スイス、ドイツ、フランスですと、だいたいどこの町にもいくつかの仏教センタ



一があり、それはビルの一室であったり、広大な敷地に建つ寺であったり、形式はさまざまです。主催者も、たとえば日本人のお坊さんに多いのですが、個人が一定期間ホテルを借り切って接心を行ったり、チベット仏教のように一人のカリスマ的僧侶を中心とした教団が多く支部を持っていたり、イエズス会のようなキリスト教の修道会が禅センターを運営していたり、本当にさまざまです。イエズス会というのは、フランシスコ・ザビエルが所属していたヨーロッパでも非常に古い、世界規模の宣教集団で、日本では上智大学を運営しています。イエズス会には禅に深い関心を抱いていた人がいて、スイスの修道院の敷地内に大きな禅センターを持っています。私もそこへ行きましたが、十字架のついたセミナーハウスの隣に畳敷きの広い本堂があり、また座禅のための個室、広大な庭園があって、あのイエズス会が、こんなすごい「寺」を持っているのかと、はじめて見た時にはカルチャーショックで眠れなくなりました。今、ヨーロッパの仏教はここまで来ているのかという驚きで圧倒されました。

そこに集まる人々は、たいてい高学歴のエリート層で、セミナー1日で約6万円、合計12日から14日の1コースで50万ほどの費用がかかります。私も一度コースでセミナーを受講したいと思いますが、そこまでの費用は払えません。また中には大金を寄付して、まるで天国かとおもわれるほど美しいところにチベット僧院を建てたり、湖を見下ろす景勝地に寺を建てる人もいます。スイスのオーケストラの指揮者がチベット仏教の僧院をレマン湖の湖畔に建てましたが、一面の雲海にフランスアルプスが浮かぶ別天地で、スイスにもまだこんなに美しいところがあるのかと圧倒されました。イエズス会の研修センターの予約はいつも満杯とのことで、セミナーハウスの中に入ると圧倒的に多いのはやはり中高年です。60年代に若者だった人たちが、現在の仏教徒の安定した中核かと思われます。彼らは非常に熱心で、私の5~60代の知人たちも日本語やチベット語を勉強していて、自分で経典を読み、深い理解を目指していますが、仏教や禅の実践だけではなく、その根底の文化にも関心を持つような人が多いのも特徴です。

調査の関係で仏教徒の友人が多いのですが、私は彼らにときどき門前町のことを書き送っています。彼らは大変興味を持ってくれて、空港のそばにこんなに大きなお寺があり、その寺と一緒に繁栄してきたこんなに素敵な町があるなんて知らなかったと言います。かれらは、「門前町」という仏教都市の伝統や景観にも深い関心を抱いてくれます。チベット仏教が広く受け入れられているので、密教に関心を持っている人も多く、成田山がスイス別院やドイツ別院を作れば、外国人の講中ができて参拝してくれるのではないかと、「仏教」が成田と海外を結ぶひとつのキーワードになるのではないかと思うくらいです。高野山は現在外国人観光のスポットになっていますが、成田も単に通るだけの観光地ではなく、仏教に関心のある人々にリピーターになってもらい、「仏教都市」として国際化ができるのではないかと、そうすればもっと世界にその魅力をアピールできるのではないかと、門前町調査をしながら考えています。

また、西洋人の多くは観光地ではなく、日本人の生活や自然な姿に興味をもっています。観光のフィールドワークで日暮里へよく学生を連れていくのですが、外国人に人気がある旅館澤の屋のご主人によれば、トイレもシャワーもない四畳半や六畳の部屋なのに、リピ



ーターが非常に多く、会社の社長クラスの人、中高年も多い。稼働率は95%くらいとおっしゃっていました。ほとんどが1週間以上の長期滞在だそうです。日本へ来る仏教徒の多くも各地の寺の宿坊に泊まっていますし、ビジネスで来る場合を除き、多くの方は旅館に泊まりたいと思っているのではないかと思います。現在は残念ながら門前町に若松さんなど数軒をのぞいて旅館がなくなりましたが、お寺をより身近に感じたい、人々の暮らしに関心があるという人は非常に多く、むしろ西洋人はこちらが主流です。成田に関心を持った人々、特に仏教に関心の深い人々に、滞在方法も含め、成田と門前町を積極的にアピールできるようなアイデアがこれから生まれればよいなと思います。

さて、前半が少し長くなってしまいましたが、門前町研究事業の話に移りたいと思います。今お話しいたしましたように、参道の変遷で一番大きいのは多くの旅館が消滅したことだと思います。商店はご商売の規模を大きくして存続していますが、旅館は明治、大正、昭和初期くらいまで、まさに門前の経済の牽引役でありながら、戦後、とくに空港開港前後には、ほとんどが中食屋に変わってしまいました。また、上町では藤倉屋さん、二軒家さんなど大きな料亭もなくなりました。私は旅館や料亭があったころの参道の様子を、当時を知る人の記憶を頼りに書き留めておきたいと考えていて、大正生まれの方を中心に、いろいろお話をうかがってきました。旅館があったころの話は『広報成田』1月15日号「門前旅館の正月風景」に少しだけ書きました。また、昨年11月に市役所で講演会を行いました。そこでも少しお話しいたしました。今日はそれについて少しお話ししようと思います。

新勝寺の門前に旅館ができたのは寛政年間という記録があります。成田山の江戸出開帳が元禄16年(1703年)ですから、それから100年近くが経っているわけです。その後、旅館は増え続けて、最盛期は明治中期です。しかし明治30年、34年の鉄道の開通、大正15年の京成電鉄開通によって、東京とその近郊の人たちが容易に日帰りできるようになり、徐々にその数を減らしていきます。ちなみに旅館数は、明治元年52軒、明治18年61軒、明治末期に47軒、大正12年33軒、戦後すぐ28軒という資料があります。

広報に掲載された写真を見ていただくとわかりますが、昭和40年ごろまで、新勝寺の正面はこのような木造3階建の旅館が立ち並んでいました。これは大正後期の写真ですので、このすぐあとに手前の小川屋は蓬莱閣ホテルになりました。この写真は檀頭であった小川屋の葬儀の御前招待の様子です。このころの旅館の経済力は相当なものであったと思われます。鉄道の開通で東京近郊の宿泊客には翳りが見えて来たとはいえ、関東一円や東北などからの講中はまだまだ盛んでしたし、なにより旅館では人件費がほとんどかかっていませんでした。女中さんはほとんどチップだけで、旅館によってはチップを主人に渡し、公



平にわけていたところもありましたが、だいたい個人の稼ぎで、着物などは自前だったようですから、大変だったのではないかと思います。旅館の切り盛りはおかみさんでした。では、旦那さんたちは一体朝から夜まで何をしていたのか、何人かに聞きましたが、よくわからないとのことでした。主には帳場、魚の仕入れ、料理の監督などで、あとは町の仕事、消防、隣組、参光協会などのほかは、能や謡、ゴルフ、写真、菊づくりなどの趣味に没頭していたのではないかと思います。

広報でも書きましたが、戦前の旦那衆は有閑人でした。この事業の最初のきっかけは、「今は参道商店の跡継ぎ息子が商売より市役所に勤めたいという時代。しかし昔の門前町はもっと活力があった。旦那衆は門前の文化を牽引していた。そういう時代があったということを書き残してほしい」ということでした。門前町の外の農村部の出身である市役所の人がこの話を聞いて、「門前町は豊かで在は貧しかったという構図を再確認するということですねえ」とため息をついていましたが、「文化」というのは暇とお金がないと花開かないもののように、江戸の元禄時代に庶民文化が盛んになったのも、庶民にゆとりがでてきたからですし、ヨーロッパの芸術、文芸、膨大な海外コレクションなどもしかりです。それは現代の大きな遺産になり、今につながる文化の土壌になっています。参道の旦那衆があり余る暇とお金を持っていた時代があったからこそ、人々が入れ替わり町の風景が変わっても、今の門前町の伝統や生き方というのがあるのだと思います。

旦那衆ということばからは、今の祇園祭で浴衣とたっつけを着る世代を想像しますが、当時は結婚すれば20歳でも旦那でした。今はお祭りで半纏を着る世代があって、その世代は町の旦那衆の行事には出られません。愛宕様とか花崎町の初戌講、上町の初戌元講とか、全員がお祭りで浴衣を着る旦那衆です。しかし、当時は「若衆」といものがなかったのです。お祭りは旦那と子供が担っていました。大正生まれのかたの話によると、山車を引くのは町内の子供と旦那さんで、中学生になるともう山車には出てこなかった。ましてや20代の若者は山車など引かなかった。ただ、結婚すれば浴衣を着て、町の役員として参加したと言います。それは、多分昭和30年代くらいまで続いたのではないのでしょうか。戦後すぐの集合写真には子供と旦那さんが主で若い人はあまり写っていません。ただ、交道会だけは別で、お寺で働いているとび職の人や職人が引いたので、非常に威勢がよく、町の山車とは全く違ったようです。

ちょっとお祭りの話にそれてしまいましたが、ちなみにお御輿もまったく様相が違って、今では各町の役員先導のもとに、お行儀よく巡行しますが、当時はあばれ神輿で、気に入らない家があると御輿ごと入って行って、あちこちにぶっつけて家の中のものを壊したりしたそうです。子供たちは浴衣に襷掛け、男の子も化粧をして、雰囲気としては女装に近かったそうです。そんな恰好だったから中学生にもなると山車を引かなくなったのかもしれませんが。今の若者が着るような格好いい半纏ができるのは、戦後10年以上たってのことだと思います。祭りの風俗はかなり早いスピードで変わってきますが、唯一変わらないのは山車を引くときの歌で、学校から子供にふさわしくないと禁止されながらも、細く長く生き続けてきたようです。

さきほど、お金と暇のある旦那衆が門前町の文化を牽引してきたという話をしましたが、旦那衆が 60 代、70 代ではなかなかこのような「遊び」の文化は生まれません。『広報成田』の 6 月 15 日号にも書きましたが、当時は能と謡が大変盛んでした。大野屋の能舞台はまさにその名残です。謡曲の会の旦那さんたちは週に何回も稽古日があり、月の大会、季節の大会、年大会と目まぐるしい日程をこなしています。夏の大会では、「ゆかた 2 枚と猿股、タオル持参とのこと」という注意書きがあって、クーラーもない中で、蚊の餌食になりながら、全員が浴衣と猿股を着替えながら 12 時間以上謡をうたい続けたようです。まるで芸術作品のような独自の謡曲の本を作ったり、清元に打ち込んだ人は成田音頭を作ったり、御前様とゴルフに興じたり、大正時代に写真に凝ったり、とにかく非常に活動的です。20 代、30 代の旦那が多いのですから当然なのかもしれません。こう見るとまるで朝から遊び暮らしていただけのように思われますが、しかし生活を憂うことがなかったということは、町の公の仕事にも積極的に取り組む人が多く、公私を通して町に活力をもたらしていたということでしょう。

しかし、昭和 13 年の開基一千年祭が頂点で、その後は時代も戦争に向かい、町もだんだんその影響を受けていきます。戦争中のことは広報の 7 月 15 日号にほんの少しだけ書きましたが、旅館や商店の使用人が徴兵されて、旦那衆も家の仕事をするようになります。町は武運長久のお参り客が来ますから、人の波は途絶えなかったようですが、その分旦那衆の出番が増えたようです。旅館は軍が使用することもあり、それを受けることで旦那さんたちは徴兵されなかったという話も聞きました。その点はまだ資料を調べなければなりません。終戦間際には、海軍病院の病室に使われた旅館もありました。若松、佐野屋、魚田丸家は全館海軍病院に使われ、どの部屋も白い浴衣に戦闘帽の傷病兵であふれたそうです。駿河屋と多津美は陸軍が使っていました。成田中学校も一時陸軍が使い、生徒たちは新勝寺客殿で勉強しました。旦那さんたちは隣組をまとめ、防空監視所をまかされ、総動員で働きました。

戦後のことは、もうご存じの方も多いと思います。国際空港の開港や新本堂の完成という次の大きな変化が現在の参道の原風景を作りました。このような時代の変化と参道の移り変わりをきめ細かく、人々の生活に焦点を当てて調べていくのが、「門前町研究事業」の本来の目的です。町の多くの方のインタビューに基づくので大変時間がかかる仕事です。正直なところ、まだまだ足りない部分が多いので、ここで事業が終わるのは大変残念なことです。

門前町で育ち、現在は遠くにお住いの方にもお話をうかがっていますが、『広報成田』7 月 15 日号に掲載した大正 15 年生まれの鈴木初子さんから、広報課にお礼状が届いたそうです。鈴木さんによれば、外に嫁いで 66 年が過ぎたけれど、門前町で過ごした 23 年はそれより重く感じるとのことでした。成田が栄えることが何よりうれしく、今も元気で暮らせるのはお不動様のおかげであるとおっしゃっていました。この調査を通して、門前町の記憶がよみがえり、そこに住んだ方々、住んでいる方々の町への愛着をさらに深めることができれば、これに越したことはありません。これこそがまさにこの事業の真の目的なのではないかと思っております。

当時の参道の様子などまだまだお話ししたいことはたくさんありますが、時間の制約もありますのでこの辺で終わります。ご清聴ありがとうございました。

◇ 点 鐘 佐瀬 和年 会長

出 席 表

会員数	出席義務者数	出席数	欠席数	出席率	前回補正
62	61	43	18	70.49%	83.33%

MAKE UP CARD

氏 名	月 日	ク ラ ブ 名
堀口 路加 会員	7月9日	米山記念奨学金第2回指定高選定委員会/2016 学年度米山記念奨学金 大学説明会
堀口 路加 会員	7月16日	地区米山記念奨学委員会
喜久川 登 会員	7月23日	那須ロータリークラブ
堀口 路加 会員	7月25日	地区米山奨学生・カウンセラー・指導教授 研修会
諸岡 靖彦 会員	7月26日	地区RLI推進委員会
石橋 菊太郎、喜久川 登、高橋 正、岸田 照泰 甲田 直弘 各会員	7月31日	広報委員会
佐瀬 和年、深堀 伸之、橘 昌孝、石川 憲弘 成田 温、諸岡 靖彦、南日 隆男、浅野 正博 杉浦 健、吉田 稔 各会員	7月31日	プログラム委員会
諸岡 靖彦 会員	8月2日	地区RLI推進委員会
堀口 路加 会員	8月5日	浜松北ロータリークラブ
佐瀬 和年、深堀 伸之、成田 温、神崎 誠 渡辺 孝、佐藤 英雄、設楽 正行平野 省二 諸岡 靖彦、山田 真幸、音花 昭二、横田 匡彦 大澤 浩一、石橋 菊太郎、橘 昌孝 各会員	8月7日	奉仕PJ委員会
諸岡 靖彦、佐藤 英雄 各会員	8月8日	地区RLI-DL 養成講座

事務局 〒286-0127 成田市小菅 700  
成田ビューホテル内  
電話/FAX 0476-33-8786

例会場 成田ビューホテル  
電話 0476-32-1111  
例会日 金曜日 12:30  
例会出欠連絡先(直通)  
電話 0476-32-1192 FAX 0476-32-1078